



Title	沖縄戦の聞き書きにみる対話空間の形成過程 : ライフストーリーが語られる現場の検討
Author(s)	石川, 勇人
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2026, 59, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104549
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

沖縄戦の聞き書きにみる対話空間の形成過程

—ライフヒストリーが語られる現場の検討—

石川 勇 人

キーワード：沖縄戦／ライフヒストリー／対話的構築主義／トラウマ記憶

1. はじめに

(1) 本論文の目的

図1は、沖縄戦体験者の松茂良美智子さん^{まつもら} [以下、人名敬称略] が1961年に、6枚の便箋にびっしりと書き残した未公開の沖縄戦体験記である【図1】。沖縄戦に関する住民の証言記録の編纂が1960年代後半から1970年代初頭にかけて本格化したことを踏まえると¹⁾、本手記は、それ以前に記された戦争体験の証言記録として、極めて貴重である。

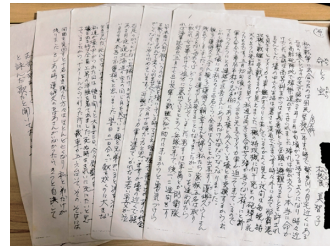


図1 1961年に書かれた松茂良美智子の6枚の手記（筆者撮影）

「命^{ぬち}どう宝^{たから}」²⁾ というタイトルで始まる手記の終盤には、「豚肉入りの油みその入ったおにぎりは、壕の臭い、避難中の忌わしい体験を思い出すので食べられません」と記されている [松茂良美智子の手記より]。この一文は、

- 1) 沖縄戦体験記録運動については、石原[1986]、鳥山[2006]を参照されたい。
- 2) 屋嘉比収によると、「命どう宝」という言葉が流布される端緒となったのは、1982年の教科書検定問題である。『沖縄タイムス』の新聞上で「命どう宝」という語句が取り上げられ、多くの県民の耳目にふれて認識されたことが大きかった [屋嘉比2002]。そのため、1960年代初頭の沖縄社会の中では、庶民の生活や個々の場面で使用されていたと考える方が妥当であろう。

沖縄戦体験が松茂良の身体・精神に深く刻み込まれていることを示している。一方で、松茂良は2018年に筆者が聞き書きを行うまで、手記を家族や第三者に見せたことはなかったという。後述するように、この手記には書くことができなかった沖縄戦体験が存在したが、そのことについて松茂良自身が語ることもなかった。

本論文の目的は、松茂良の「書かれなかった／語られなかった沖縄戦体験」が、筆者による聞き書きの中でいかに語られていったのか、そしてその変化を可能にした「対話空間」が、どのように形成されたのかを明らかにすることである。

(2) 先行研究

以下では、本論文の方法論的枠組みとして位置付ける社会学の生活史研究、特に対話的構築主義に関する議論を概観する。日本において生活史研究が注目されるようになったのは、1970年代である。同時期の先駆的な研究として、社会学者の中野卓や長崎の被爆者の生活史調査を行った石田忠が挙げられよう。中野は1971年に岡山県倉敷市にある「水島コンビナート」の公害問題に関する住民意識調査を行い、その調査を通じて出会った内海松代（仮名）の生活史を記述している。中野は、内海が水島の貧しい田舎で、かつ複雑な家庭環境に育ち、満州や朝鮮といった日本の植民地を移動し、やがてコンビナートの漁村へいたるまでの生活史を通史的に描出している〔中野1977〕。他方、石田忠は長崎で被爆した福田須磨子の生活史に焦点を当てている。石田によれば、福田は原水爆禁止運動に参加し、諸団体の人々と交流を深める中で被爆者としての立場を自覚し、「体験の語り手」として主体化したという〔石田1973〕³⁾。中野や石田の研究は、いずれも個人史を通史的に描くことで、その体験を社会的文脈に位置付けようとした。これらの研究

3) 石田の一連の議論は、「エンパワーメント」(empowerment)の議論にもつながる。エンパワーメントに関する代表的な研究としては、〔宮地2007〕、〔Lynn2009〕、そして〔西村2018〕などが挙げられる。

は、語りの時系列的な編成や事実性を重視する〔桜井 2022〕という特徴を有している。しかし1990年代以降、言語論的転回や構築主義（constructivism）の台頭により、語り手と聞き手の「対話」による相互構築物（dialogical constructivism）という点が注目されるようになった⁴⁾。対話的構築主義の立場では、「研究者を含めた人びとのやり取りを通じて社会的現実が構成される」とされ〔桜井・石川 2015:3〕、語り手と聞き手の相互行為の分析が重視される。さらに2000年代に入ると、社会学の分野では、聞き手が持つ常識や価値観、暗黙の前提などの「構え」を明示する必要性や〔桜井 2002〕、聞き手自身の経験を再帰的に分析し、自己言及的（反省的）にその視点を振り返る意義が提起されるようになった〔石川 2012〕⁵⁾。

一方でこうした展開は批判も招いた⁶⁾。社会学者の蘭由岐子は、対話的構築主義という方法論が確立された結果、「聞き取られたこと＝語られたこと（内容）が生き生きと実感できず、インタビューの語り手の“人生”を知ったという感覚がもたらされない」と述べている〔蘭 2009: 39〕。また社会学者の石川良子と西倉実季も、「語り手と聞き手の相互作用の産物＝対話的構築主義という安直な理解が、対話的構築主義がマニュアルとして『消費』されてしまうことに繋がった」と指摘している〔石川・西倉 2015: 9〕。

-
- 4) 1980年代に、ホロコーストの記憶言説が欧米諸国で注目され「メモリー・ブーム」が起こった点も見逃せない〔Winter 2001〕。1990年代に入ると、ホロコーストの「文化的記憶」(cultural memory)は、博物館やメディア、書籍・映画といった諸媒体を通じて膾炙し、「トラウマ」の特権的なメタファーとして学会でも君臨した〔Huyssen 2003:14〕。
 - 5) 一方で、調査者が自らの調査経験を積極的に振り返ることは、逆に読者に閉塞感を与えてしまうといった批判もなされた。代表的な批判として野上〔2006〕が挙げられる。
 - 6) 主な批判として足立〔2003〕、朴〔2011〕、岸〔2018〕などがある。桜井の方法論は、語りの事実性や調査者・第三者による語りの解釈の余地が閉ざされていると批判されたが、桜井が対話的構築主義を提唱した根底には、伝統的な社会調査において、現場にいるはずの調査者の主体性が捨象されてきたことへの批判があったことは見逃せない〔桜井 2002:12〕。

このように方法論に対してさまざまな課題が指摘されてきたものの、今日における対話的構築主義の立場においては、聞き書きの場が語り手と聞き手の共同作業によって成立するという点は、多くの研究者に広く受け入れられている〔野口 2009, 小林・浅野 2018, 佐藤 2021, 宮坂 2025〕。しかし、戦争や災害、差別体験など、少なからずトラウマ記憶を回帰させる体験を聞き書きでは、その場が初めから成立するとは限らない。「なぜ、思い出したくない話を聞くのか」「あなたに話したところで、体験した者にしかこの辛さはわからない」といった拒絶や疑念が、語り手から聞き手に対して率直に投げかけられることは、実際の調査において少なくない〔根本 2015〕。人類学者の L.L. ラングネスと G. フランクが指摘したように、「フィールドワーカーは神秘的な力をもつ異邦人であり、恐れられ警戒されるべき存在」であるため、フィールドにおいて調査者が外来者（stranger）として認識されることは避けがたいのである。だからこそ、一度調査者が語り手に外来者としてラベリングされると、信頼関係の構築には時間を要する〔Langness・Frank 1981 = 米山・小林訳 1993: 51-52〕。

また、生死に関わる体験の聞き書きでは、体験者の沈黙に遭遇することもある。1977 年に慶良間諸島の「集団自決」の聞き書きを行った嶋津与志（大城将保）は、体験当事者の沈黙に直面した。ただし、嶋の議論で特筆すべき点は、沈黙を体験の表象不可能性として読み解くのではなく、「語ろうとして言葉にならない」ことや「沈黙の背景にある諸要因にこそ注意を向けるべき」と指摘した点にある〔嶋 1977〕⁷⁾。なかでも「証言行為」の文脈で発話／沈黙の境界性を鋭く指摘したのが、社会学者の直野章子である。直野は被爆者の証言が「『反核平和への証言者』として発されていない言葉は、＜被爆

7) 嶋津与志（大城将保）の議論を踏襲した沖縄戦後史研究者の鳥山淳も、沖縄戦の聞き書きの現場における沈黙を注視している。鳥山は聞き書きの場は「詳細な記録を紡ぎ出す」だけでなく、体験者の沈黙を「聞き手の想像力」をもって受け止めることで、「沈黙が『証言』として聞き取られていく」という点を指摘している〔鳥山 2006 : 403〕。

証言>として聞き取られることはない」と論じた〔直野 2009：14〕。これらの議論を踏まえると、聞き手の「聞き方」や聞き書きの目的が、語られる内容や沈黙の領域を規定していると考えられる。それでは、聞き書きの現場を念頭においた際、いかなる理由で体験者の沈黙の領域が生まれてしまうのだろうか。本論文では、松茂良の語りを事例に、聞き書きの現場における沈黙と発話の力学、そして対話空間がいかに形成されるのかを考察する。

(3) 本論文の構成と資料

本論文の構成に入る前に、筆者が松茂良に聞き書きするに至った経緯を説明する。筆者が松茂良の聞き書きを初めて行ったのは、大学2年生（2018年）の時にオーラル・ヒストリーの講義の一環で、身近な沖縄戦体験者に聞き書きをするという課題に取り組んだことがきっかけである。そこで、当時筆者が住んでいた繁多川^{はんだがわ}地域の沖縄戦体験者への聞き書きを行おうと考え、地域のAさんから松茂良を紹介していただいた。快く承諾をいただいたものの、初めての沖縄戦の聞き書きでは、繁多川でいかなる沖縄戦を体験したかが中心であった。当初は筆者を警戒していたため、積極的に自らの沖縄戦体験を開示してはくれなかった。約4か月間、松茂良の自宅に通い沖縄戦の話を聞き続けるなかで、徐々に真玉橋^{まだんばし}での体験や捕虜になった時の話をしてくださった。ある日、松茂良が「この手記をしっかりと読んできてほしい」と言い、筆筒の奥から取り出したのが、冒頭で取り上げた6枚の未公開手記であった。そこで第2章では、1961年に松茂良美智子が書いた6枚の手記を起点に、手記にいかなる沖縄戦体験が記されているのかを、沖縄戦の刊行物と照合しながら検討する。

ここで6枚の手記の特徴を端的に整理しておく。松茂良が6枚の手記を書いたのは1961年に市役所の職員を「寿退社」した時であった。家で過ごす時間が増える中で「自身の戦争の記憶が鮮明なうちに書き残したいという気

持ちから、必死にペンを握って沖縄戦体験を記した」⁸⁾ という。手記の詳細については次章で検討するが、松茂良は沖縄戦で1歳の甥っ子を亡くしているものの、その事実を手記には書いていない。そこで第2章の後半では、松茂良の記憶の「空白」を筆者がいかに感知したのかを振り返りながら、手記には書かれなかった沖縄戦がいかに語られるかを検討する。第3章では、松茂良が自身の沖縄戦体験と向き合いながらも、「話を聞いてくれる人に体験を話したい」と思うようになった心情の変化を考察する。第3章の後半では、筆者だけでなく、松茂良の聞き書きを担った花城さくら（仮名）の口述記録も用いながら、聞き手の存在意義を明確にする。これらの分析を通じて、聞き手が静的な主体として聞き書きの場に存在しているのではなく、語り手が安心して語れる場を構築したり、体験の「空白」を言語化したりするなど、能動的な役割を果たしていることを指摘する。

なお、次章以降で取り上げる松茂良のライフヒストリーは、2018年12月～2019年12月、2021年6月、2022年3月、そして2023年3月と9月に松茂良の自宅で行った口述記録に基づいている。その他、フィールドメモも活用しながら、松茂良の沖縄戦体験を紐解いていく。また花城の口述記録は、2023年12月にオンライン（ZOOM）で行った調査に基づいている。

2. 松茂良美智子のライフヒストリー

(1) 書き残した戦争体験の一端

松茂良美智子は1932年に沖縄県真^ま和^わ志^し村（現那覇市）の繁多川に、7人兄弟の6番目として生まれた。沖縄戦前は、母のツル、弟の朗、次男のトミ、

8) 松茂良美智子への聞き取りより、2019年6月。この点について2023年9月30日に聞き取りを通じて再度確認した。本論文では、筆者の補足が必要と判断した箇所は〔 〕を付け、説明を加えている。その際の引用者註は割愛した。なお、本論文で取り上げる松茂良の語りについては、松茂良本人に内容の確認を依頼し、必要な修正を経たうえで、了承を得て使用している。

そして1歳の甥っ子（嘉順）⁹⁾の5人で暮らしていた。

松茂良は1944年10月10日に「十・十空襲」を目撃している。防衛庁防衛研修所戦史部が所蔵する『沖縄方面陸軍作戦』によると、同空襲は午前7時から午後4時ごろまで5回にわたって空爆が行われた。この空襲は「旧那覇市の9割が焼失したほか、湾岸施設や日本軍の飛行場、飛行機や船舶、徴用船など」に大きな打撃を与えた。さらに「空襲によって食糧も焼失する」など〔防衛庁防衛研究所戦史室 1968:118-124〕、その後の住民たちの生活に深刻な影響を与える出来事であった。しかしながら、当時その空襲を目撃した松茂良は「友軍が来たと喜んだ」という。実際に『繁多川 100 周年記念誌』によれば、最初戦闘機が飛んで来た時、繁多川の人びとは味方の飛行機だと思って拍手喝采したという〔繁多川自治会 2012〕。1945年3月中旬ごろから空襲が激しくなると、日中は近所にあった「イシジャヌガマ」（石田の壕）¹⁰⁾へ避難し、夜になると自宅に戻るとい生活が続けるようになった。

5月下旬までイシジャヌガマに避難していたが、米軍が迫っているから南部へ避難したほうがいいと兵隊に言われ、5月28日に、日没と共に南部へ避難した¹¹⁾。この時期の沖縄は「小満芒種」^{スーマンボース}と呼ばれる梅雨の時期にあたる。そのため南部への避難の際は、泥濘の道を家族の名前を呼び合いながら歩いた。南部へ避難する際に真玉橋を渡ったが、そこは「死の橋」だったという。実際に真玉橋は沖縄戦の際に多数の死者を出したことで知られている。

9) 筆者との会話の中で、松茂良が嘉順という名前を口にしたことはたった1回である。松茂良が筆者に語りかける時、甥っ子という言葉を用いていた。本論文では松茂良の語り口を尊重するためにも、甥っ子という言葉を用いて叙述する。

10) 「イシジャヌガマ」は、那覇市繁多川石田中学校付近にあった壕の名称である。2021年に筆者がフィールドワークを行った時には、住宅開発によってすでに壕が埋没していた。

11) 沖縄戦当時、第32軍司令部壕が首里城の地下にあった。首里に隣接する繁多川は、多くの予備兵が駐屯していた地域であった。米軍の南下に伴い、住民の島尻避難（南部避難）が軍の命令によって言い渡され、5月3日から東風平村小城（こぐすく）へ移動が始まった〔繁多川自治会 2012:140〕。

その橋を渡った伊波義雄は日本兵や民間人の死体が山のように折り重なっており死体を踏みつけて歩く人もいたと語る〔沖縄タイムス 2017 年 7 月 23 日：朝刊 25 面〕。また、真玉橋の状況を絵にした仲松庸全は、「真玉橋の所で（米軍による：引用者注）集中砲火を浴び、多くの命が奪われた。泥濘に折り重なった死屍はまるで人間のてんぷらのようだった」と記している〔NHK 沖縄放送局 2006:20〕。松茂良も命懸けで橋を渡ったが、なかでも橋を渡った直後に目撃した光景は、現在も鮮明に覚えていると話す。

松茂良）道路には馬の死がいと人間の死がい、あちこちに転々としていてね、もうすさまじい臭いがするわけ。夜に橋を渡ったんだけど、照明弾がピカーッ！ってあがるの。すぐ地面に伏せた。歩いている時はよく死体に躓いたね¹²⁾。

10 歳の弟の手を引っ張りながら、家族と一緒に義弟の嫁の実家がある高嶺村の第二与座（現糸満市豊原）へ避難したが、そこでは隠れる場所を探すのに苦労した。『糸満市史 資料編 7 戦時資料下巻』によると、第二与座集落一帯には、多数の住民が避難できる大きな壕はなかったため、住民たちは屋敷に壕を掘ったり、あるいは親戚同士や班で壕を掘ったりして「鉄の暴風」を凌いだという。それでも壕へ避難できない場合は、山中の岩陰に隠れてやり過ごしたケースが多い〔糸満市史編集委員会 1998:418〕。実際に第二与座で隠れる場所を見つけられなかった松茂良たちは、近くの農家の人に 250 円を払い、簡易的な壕を掘ってもらった¹³⁾。そこで 4 日から 5 日間過ごしたが、攻撃に耐えられないと考え、近くにあった壕に移動した。

6 月 10 日頃から、避難していた第二与座の壕の周辺が騒々しくなったため、いよいよ米軍が迫っていると思い、日没と共に沖縄島最南端の喜屋武岬を目指して歩いた。そこでも 200 円で壕を買ったが、その壕は「庭に掘った

12) 松茂良美智子への聞き取りより、2019 年 3 月。

13) 松茂良美智子の手記より。

防空壕みたいで、畳一畳半くらいの穴の上に木材を並べて、その上にコーラル（石粉）を敷き詰めた」¹⁴⁾ ごく簡単な造りの壕であった。そこでしばらく避難生活を送っていたが、ある日、首里出身の学生が壕の近くへ来て「首里ぬあやーさい、戦や負きとーいびーぐとう、手上げてい、出じていめんそーれ」（首里のお母さん、戦争に負けました。手を挙げて出てきてください：筆者訳）と言われ、壕を出るか、それとも壕内で「自決」をするかの選択を迫られた。沖縄戦当時、国民学校高等科の1年生だった松茂良にとって、「捕虜になるよりは死を」という発想は、ごく普通のことであった。というのも、「女はさんざんいたずらし、男は男根を切る」という言説が、学校教育の現場や日本軍によって住民たちに共有され、その言説を内面化していたからである〔清水 2019:33-35〕。そのため松茂良は本気で「自決」をするつもりであったが、一緒に避難していたお婆さんに投降するように説得されたことで、殺される覚悟で米軍に投降した¹⁵⁾。

(2) 書けなかった体験が語られる時

前節で扱った手記の内容を端的に整理すると、松茂良は繁多川、真玉橋、第二与座を転々とし、最終的に喜屋武岬で捕虜になったということがわかる【図2】。

半年ほどが経過した2019年6月、筆者が松茂良に「第二与座で何かあったんですか」と尋ねた。すると松茂良はその場で泣き崩れ、しばらくの間「じゅんちゃん……じゅんちゃん……ごめんね、ごめんね、自分のせいで

14) 松茂良美智子の手記より。

15) 松茂良美智子の手記より。体験者が「自決」を思いとどまった背景については、歴史学者の屋嘉比収が詳細に分析している。屋嘉比は、糸満市のカミントウ壕の「集団自決」の生存者である大屋初子の体験記録や、慶良間諸島の「集団自決」の生存者の証言分析を通じて、「自決」を思いとどまった人々の多くが、高齢者や幼児の「死にたくない」という声を聞き入れられたという点が、生死の分岐点になったことを指摘している〔屋嘉比 2009:44,45〕。

……ごめんね……」¹⁶⁾と吐露していた。体験者が目の前で泣き崩れる場面に立ち会うことは、筆者にとって衝撃だった。なぜなら、筆者自身、沖縄戦体験が家族の中で語られることはなく、体験者の感情の機微に直接触れるのは初めての経験だったからである¹⁷⁾。筆者は松茂良に「嫌な思いをさせてしまってごめんなさい」と謝ったが、松茂良



図2 松茂良の沖縄戦時の避難経路図
(松茂良の聞き取り調査を基に筆者作成)

は泣きながら「もうこの話は絶対に言いたくないのに」と呟いた¹⁸⁾。筆者が「もう聞き取りをするのはやめますね、失礼なことを聞いてしまってごめんなさい」と声をかけたが、「ちょっと待って、その場にいてちょうだい」と言われたため、松茂良が言葉にするのを待つことにした。1時間弱が経過した後、「この話は誰にもできなかつたんだけど、でも話さんとね」¹⁹⁾と前置きをして、第二与座での2つの体験を語り出した。

第二与座の義弟の家に避難した際、その家の近くには第24師団²⁰⁾所属の

16) 2019年6月の筆者のフィールドメモより。

17) 筆者の体験については、石川[2025]を参照されたい。

18) 2019年6月の筆者のフィールドメモより。

19) 松茂良美智子への聞き取りより、2019年6月。

20) 「第24師団沖縄作戦記録復員局調整」によると、同師団は5月29日に島尻南部丘陵地隊に拠り、更に持久戦を継続するために島尻地区に転進している。6月2日に戦闘司令部があった新垣(現糸満市)へ前進し、6月6日に宇江城(うえぐすく)へ前進している。そして6月10日に与座一体での攻防戦を展開している[第24師団司令部史実史料 第32軍残務整理部 複製1963: 5-6,28-30]。

ある部隊が首里前線に出勤するまでに使用していた小さな壕があった。その壕へ義弟の家族も一緒に避難をしたが、5月20日、松茂良が壕の外に出ようとした瞬間、米軍の偵察機（グラマン）に見つかった。松茂良が壕へ引き返した直後、壕の入口付近に爆弾が投下され、凄まじい爆風が壕内を襲ったという。

松茂良）私が運悪く米軍の偵察機に見つかって、「やばい、見つかった」って思って急いで壕の中に引き返したの。そしたら直後、壕の入口に爆弾が落ちてね……ものすごい爆風で私は壕の奥まで吹っ飛ばされたの。で、意識を失って、気づいたら、壕が崩れていてね……爆風で崩れた泥土の塊（クチャ）が甥っ子の胸に当たったみたいでね……。まだ1歳だったからね……「ハッ、ハッ、ハッ」って呼吸がどんどん荒くなって……「じゅんちゃん、じゅんちゃん」って呼んでもね、苦しそうにしていたのね……もう日に日に冷たくなっていったから、もう助からないなと思った。亡くなる前日の昼に壕の付近で猫が鳴いていて、あの砲弾の中だからありえないと思うけど、それを聞いた時に、あ……[この猫は]、甥っ子のことを迎えに来たんだなと思った。翌日の朝、甥っ子は息を引き取ったの²¹⁾。

長い苦しみの末甥っ子は亡くなったが、筆者とのやり取りの中で、甥が亡くなる前にも急死に一生を得た体験をしたと話した。

松茂良）あれも私がねグラマンに見つかって、近くの小屋に引き返した

- 21) 松茂良美智子への聞き取りより、2019年6月。この話は田村洋三の著作物でも言及されている。同書では「この壕の前で砲弾が炸裂、壕の天井が落ち、丸太が不運にも亡き次郎の嫁トミが抱いていた長男・嘉順に当たり・重体となった」となっている[田村 2011: 200]。しかし、松茂良が避難した壕は簡易的な作りであり、広さも畳一畳分くらいのスペースであったことを考えると、材木を利用した頑丈な壕であったとは考えにくい。

のよ。したら艦砲が「シューッ、ドン」って小屋付近に落ちたの。で、気づいたら、隣にいた少年の首に艦砲の破片が突き刺さって……亡くなっていたの。もうね……申し訳なさと、あまりの怖さでね、見て見ぬふりをしてその場を去った²²⁾。

これらの語りは、松茂良が1961年に書いた6枚の手記には書かれていない。なぜ手記には書かなかったのか。その複雑な心情を以下のように語った。

筆者) 手記には甥っ子さんの話が出てこないよね。やっぱり書けなかったの？

松茂良) 書くかどうか迷ったけど……あの手記は泣きながら必死に書いたし、とにかく思い出すのが怖かった。手記を書きながら、甥っ子が冷たくなっていく感触も思い出したし、最期の顔もパツって浮かんで……第二与座での少年の無惨な姿も思い出してね、毎晩、毎晩。ごはんも食べられないし、寝ていてもあの最期がバーって浮かぶでしょ。もう苦しかった。

筆者) そうだったんですね。毎晩思い出していたんですね……手記を書いていることは誰にも言わなかったんですか？

松茂良) 当時はね「手記を書いていることは」子どもにも言わなかった。だから1人……1人でずっと一泣いては書いての繰り返し……²³⁾。

松茂良のこうした語りは、米文学者のキャシー・カルースが指摘したトラウマ記憶の「直写性」(literality)²⁴⁾を彷彿とさせる。カルースの述べる「直写性」とは、混沌とした体験を主体が体験した場合、自分が何を体験したの

22) 松茂良美智子への聞き取りより、2023年9月。

23) 松茂良美智子への聞き取りより、2023年9月。

24) カルースの理論は、トラウマ記憶の特徴を掴み取っていると評価できるが、一方で理論的解釈に対しては厳しい批判もある[直野2018]。

かを精確に理解できないがゆえに、その出来事は「そのままの形」で保存されるということを指す [Caruth=下河辺訳2000: 16]²⁵⁾。こうしたトラウマ記憶の特徴は「トラウマ的体験のもたらす根源的破綻や裂け目」[Caruth=下河辺訳2000:14]と表現され、表象不可能な語りとして位置付けられる。しかし、直野章子が警告するように、体験者はフラッシュバックに苛まれながらも何らかの言葉を発している [直野 2015]。医療社会学者のアーサ・フランクの言葉を借りるなら、「病む身体は確かに沈黙しているわけではな」く「痛みや症状のなかで雄弁に語っている」のである [Frank = 鈴木訳 2002: 18]²⁶⁾。こうした「語りえなさ」を何とか語ろうとする瞬間、語り手は言葉を手繰り寄せる。その時立ち現れるのは、批評家のレイモンド・ウィリアムズが注視した、まだ十分に表現されていない待機状態にある言葉の欠片が蠢く領域であるといえよう [Williams 1977: 126-127]。松茂良は、そうした領域が確かに存在するというのを、聞き手に伝えようとしているのである。

本章では、松茂良美智子の手記と筆者による聞き書きの内容を検討することで、手記に「書けたこと」と「書けなかったこと」との境界を明らかにした。松茂良は、甥や少年の死を手記に記すことができなかったが、筆者の聞き書きの中で徐々に言葉にしていっていった。その過程には、トラウマ記憶の直写性による言語化の困難性があるが、それでも「語りえなさ」を突破しようとする姿が見て取れる。こうした語りが浮上した背景には、聞き手との関係性や場の形成が影響していると考えられる。この点を踏まえ、次章では、聞き手が聞き書きの場をどのように形成し、沈黙から語りへの移行をいかに可能にしたのかを考察する。

25) トラウマ記憶が凍りついたように保存されるという特徴は、心理学者である森茂起も「瞬間冷凍」という言葉を用いて説明している [森2005: 10]。

26) ただし、そこで発せられる言葉の数々は、「理解や記憶として定着していない出来事によって圧倒された記憶の断片」にすぎない [Felman1992: 5] という文芸評論家のフェルマンの指摘は見逃せない。

3. 聞き書きの場における調査者の役割

(1) 「聞き手は誰でもいいわけじゃない」

松茂良は第二与座での甥っ子の死を話して以降、毎晩のように甥が亡くなる場面を思い出したり、不眠に悩まされたりするようになった²⁷⁾。こうした記憶の特徴は、実験心理学などで用いられる「記憶」の性質とは異なっている。実験心理学の記憶実験では、記憶は脳・身体のどこかに保存されており、主体の状況に応じて想起できるとされている [原田 2000]。しかし、松茂良の語りはそうした「記憶」とは相容れない部分がある。むしろ、松茂良の語りは、凄惨な記憶が時と場所を選ばず主体に襲い、自分の意志では記憶を制御できないという、もう1つの「記憶」の側面を伝えている。2019年の6月頃からはばらくの間、そうした状況に襲われ続けた松茂良は、その間、筆者に対して「あんたが聞きにきたせいで、私は日常生活がままならない、どうしてくれるんだ」²⁸⁾と怒りをぶつけた。その語りに対する聞き手の責任を痛感した筆者は、松茂良の家に聞き書き以外でも頻繁に通うようになり、一緒に食事をしたり、世間話をしたりする時間を取るようになった。筆者は沖縄戦の話は極力避け、松茂良が市役所で働いていた時の話や、学生時代の話など、松茂良の生活史を広範に聞いた。2019年の秋頃から、松茂良の心情の変化が起き、「やっぱり話したくないけど、沖縄戦の話は忘れちゃいけない」²⁹⁾と語るようになった。

松茂良の「やっぱり話したくない」という語りには、自分のせいで甥っ子を亡くしたという「罪悪感」が存在する。糸満市摩文仁には、沖縄戦で戦没した人々の名前が刻銘されている「平和の礎」と呼ばれる碑が建立されている。しかし、繁多川の戦没者一覧の中に、甥っ子の名前は刻銘されていない。

27) 松茂良美智子への聞き取りより、2019年12月。

28) 2019年6月の筆者のフィールドメモより。

29) 松茂良美智子への聞き取りより、2019年6月。この点は2020年6月にも電話で確認した。

(筆者) 甥っ子の名前は平和の礎に刻まなかったの？名前がなかったから。

(松茂良) 平和の礎があるでしょ。あそこには戦没者の名前が刻まれているの。でもね、私の甥っ子の名前はあえて刻まなかった。自分が、グラマンに見つかってしまったせいだね……その後、壕の近くに爆弾が落ちて、甥っ子は死んでしまったから……もうずっと甥っ子の死が心に残っていて……戦後、[甥っ子の] 遺骨も拾いにいったんだけど、兄弟に預けたの。南部に行ったのは数回。やっぱり怖くて行けない。だからさ、甥っ子の死は自分の胸にそっとしまった。だけどね、毎晩思い出すわけよ³⁰⁾。

上記の語りは、精神科医のロバート・リフトンが提示した「罪意識」という言葉で捉えることができよう [Lifton= 梶井他訳 2009]³¹⁾。「罪意識」とは、負傷者を見捨てて逃げたことや、自分だけが助かってしまったといった、主体のやり場のない心情を示した概念である。松茂良の語りからは、自分のせいで甥っ子を亡くしたという事実だけでなく、戦争体験を語る最中も、その「罪意識」を抱きつつ自己を内省する姿も垣間見られよう。そうした蠢く情動³²⁾を、聞き書きの場を通じて聞き手は感じ取るのだ。

2019 年 11 月頃から、松茂良は「話をきいてくれる人に話したい」と語るようになったが、筆者はその真意を理解することができなかった。なぜなら、松茂良は 2010 年から 2011 年にかけて数回文筆家の取材に応じていたからである。なぜ、取材経験がある中で、「話を聞いてくれる人に話したい」と語ったのか。松茂良は当時の心境を以下のように語った。

30) 松茂良美智子への聞き取りより、2019 年 12 月、2021 年 6 月。

31) リフトンの調査に対する評価・批判については、八木 [2013] を参照されたい。

32) 記憶には「情動」が含まれるというのは、集合的記憶論の泰斗であるアルバックスの理論から読み取ることができる [Halbwachs= 小関訳 1989]。また、アルバックスの理論的枠組みを踏襲しながら、記憶の「身体実践」について論じた Connerton の研究からも読み取ることができる [Connerton 1989]。

松茂良) 記者の方々が聞きに来てくれるんだけどね。あ、ちゃんと話を聞いてくれそうだな、聞いてくれなさそうだなってというのが、[相手と話していると] よくわかるのね。だから、自分の本音が話せなかった時もあったさ。自分の語りを受け止められるかって大事なのよ、聞き手は誰でもいいわけじゃない³³⁾。

松茂良は、過去の文筆家の取材では「自分の本音が話せなかった」と語った。当時の取材では、沖縄戦中の話が中心であり、聞き手が一方的に質問を投げかけ、それに松茂良が応じる形で進められていたため、甥の死や沖縄戦体験に向き合う辛さを話すことができなかったという³⁴⁾。要するに、聞き手の「聞く枠組み」が欠如していたこと、あるいは「聞き方」が適切でなかったことにより[直野 2004, 石川 2021]、語り難い体験が言葉として立ち上がる契機そのものが奪われていたのである。だからこそ松茂良は、語りを通して聞き手に問いかけたのだろう。単に語り手と聞き手が相対するだけでは、自らの体験を安心して話せる聞き書きの場は成立しないということ。

本節までは、筆者と松茂良の聞き書きに注目し、筆者がいかに聞き書きの場を形成してきたのかを検討してきた。松茂良の本音が安心して語れる聞き書きの場が形成されたことは、松茂良自身がより多くの人々に自らの体験を語りたいと考えるきっかけになっていく。次節では、松茂良の体験を共有する役割を担った花城さくらの聞き書きを取り上げながら、その場で聞き手がいかなる役割を担っているのかを、より深く考察する。

(2) 声を「聴き」、語り手に「返す」

「話を聞いてくれる人に話したい」と語った後、松茂良の沖縄戦体験を共有化する作業が始まった。松茂良自身が「メディアを通して広く体験を知らせたい」と望んだため、当時A社で沖縄戦の取材を担当していた花城さくら

33) 松茂良美智子への聞き取りより、2021年6月。

34) 松茂良美智子への聞き取りより、2021年6月。

に声をかけ、松茂良の聞き書きを担当してもらった。具体的な聞き書きの様相を検討する前に、花城と筆者の関係性を明示しておく。筆者が花城と出会ったのは、筆者が大学1年生の時に参加した「株式会社がちゅん」³⁵⁾ 主催の沖縄戦のファシリテーション講座であった。花城は2019年にA社に入社し、社会部に配属された。A社では、入社10年未満の若手記者が沖縄戦取材を担当することになっていたため、入社まもない花城も沖縄戦の取材を担当することになった。

2019年11月、花城が松茂良に初めて聞き書きを行った際、松茂良は花城が自分の語りに真摯に耳を傾けてくれるかを確かめていた。最初は筆者の時と同様、甥っ子の話はせず、繁多川の体験と捕虜になった時の話をしていた。その話をしている時も、松茂良は言葉に詰まる時があったが、花城が「ゆっくりでいいですよ。話せそうならでいいので」と声を掛け、松茂良が言葉にするのを待っていた³⁶⁾。その後第二与座での話を語り出したが、甥っ子の死の話になると、苦しそうな表情をし、うまく話せなくなった。こうした体験者が言葉につかえる姿は、花城にとって衝撃的だったという。

筆者) 最初、松茂良さんの話を聞いた時、どんな印象を持ちました？

花城) えっと。話す時に、スラスラと出てくる部分と出てこない部分があって、この話のスピード感が、すごく記憶をたどっている感があって、それが印象に残っている。というのも、十・十空襲の取材を松茂良さんの取材の前にやっていて、その時の方は、いろんなところで講演、学校とかで体験とかを話すのに慣れている方だったし、もっと授業みたいに話している方だったから、その時のイメージとは、また全然違うなっていう。すぐ出てくるところ、なんだっけって考えているところと、あと、

35) 「株式会社がちゅん」は2014年に琉球大学の学生が中心となって設立した、ディスカッションを交えながら平和学習を行う沖縄のベンチャー企業の総称である。2018年11月2日をもって営業停止になったため、現在は活動を行っていない。

36) 2019年11月の筆者のフィールドメモより。

わかっているけど言い出しにくい話があるみたいなのを感じていたかな。あと、第二与座での体験を話す中で、甥っ子の話になった際、松茂良さんは目をグューと瞑りながら語るところが印象に残っている³⁷⁾。

この聞き書き以降、花城は松茂良の体験を整理する作業を始めた。1度の聞き書きでは、体験の細部や時間軸の流れが不明確な点が含まれていたため、その整理をするために10回以上電話での確認作業を行ったという。

筆者) 松茂良さんは語りの内容があっちこっちに飛ぶことが多かったから、電話で事実確認をしていたの？

花城) やっぱり、伝えてくれた体験やその時の感情だけでなく、松茂良さんが生きてきた中で戦争体験をどう受け止めてきたのかを残さないといけなと思って電話で確認していた。内容の確認をしたんだけど、毎回電話で、「あんたが取材始めたせいで、夜にいろいろなこと思い出すんだよ、忘れかけていた甥っ子のこととかも、あの瞬間をパッと思い出して眠れなくなったり、涙がこぼれたりするよ」と言われて、「そうですね、すみません……」って何回も謝ったけど。だけど、電話を重ねる中で松茂良さんが伝えないといけなから「頑張ろうね」って言ったのを覚えている。「頑張ってね」じゃなくて「頑張ろうね」って言っていたのは今でも覚えていて。一緒に頑張ろうと言ってくれているような気持ちになった。「語り手」・「聞き手」っていう関係性だけど、どこか両者が同じところを見ているような気持ちになった。そういつてくれたから、一緒に語りを整理していこうと思った³⁸⁾。

かくして松茂良の語りの整理が行われたが、そこで特筆すべき点は、松茂良の語りを淡々と取り上げるだけでなく、沖縄戦当時の音や臭いといった語

37) 花城さくらへの聞き取り、2023年12月(オンライン)。

38) 花城さくらへの聞き取り、2023年12月(オンライン)。

りを取り巻く「風景」³⁹⁾を記述しながら、松茂良の沖縄戦体験を叙述している点にある。なぜ、証言の「風景」を書き込んだのかについて、以下のように語った。

花城) 松茂良さんの表情、感情も含めて書こうと思った。というのも沖縄戦の取材って淡々になりやすいというか、あそこについて、こういう体験をした、誰々を亡くしたとか、歴史書、時系列的になっちゃうけど。松茂良さんがどこで苦しかったのか、その時何を感じたのかを書くことを意識していた。また、音、臭いも具体的に聞いて、松茂良さんの話している情景が細かくイメージできるまで、聞くことを意識していた⁴⁰⁾。

音・臭いといった五感に迫る記憶を書き込むというアプローチは、社会学者の小林多寿子が述べるように、「第一のオーサーの『個人的経験の語り』を他者との共有可能な語りに整序することで、実在の語り手の語りであることを読者が信じる『確からしさ』を得ることをめざ」すという聞き手側の戦略は考えられる [小林 2000:110]。しかし、花城が五感の記憶を引き出していたのは、松茂良が語る内容を「できるだけ正しく受け止めて、書いて、そして[言葉を]返す」⁴¹⁾という信念に基づいていた。多くの聞き書きの場合、聞き手が語られた内容を解釈し、理論的枠組みや歴史的・社会的文脈と接合しながら語りを他者に開くことが多い。これに対し、花城は語り手から声を受け取り、五感の記憶などの「風景」を書き込みながら叙述化を試みることで、松茂良の証言の具体性を高める役割を担っているのである。つまり花城は、整理した声を最終的に松茂良自身に「返す」ことで初めて聞き書き

39) フィールドにおける「風景」への注目とは、メキシコ最南部に暮らすインディオの男性への聞き取り調査を通じて、数世代にわたる抑圧と流動的な日常を描いた歴史学者の清水透の指摘に重なる。清水は、視覚・聴覚・嗅覚など五感で感じ取る領域や、聞き手のフィールドでの経験を注視している [清水 2022: 395-396]。

40) 花城さくらへの聞き取り、2023年12月(オンライン)。

41) 花城さくらへの聞き取り、2023年12月(オンライン)。

の場が成立すると考えているのである。そうした花城の姿勢を松茂良も感じ取ったからこそ、筆者が松茂良に花城のことを尋ねた際「この人なら安心して話せると思ったよ。一緒にやっている感じがしたからね」⁴²⁾と語ったのであろう。こうした松茂良と花城の関係性の変化は、当初は外来者である調査者が、関係性を構築していく中で「いなくてはならない人」に変化していったという事実や、調査者の能動的な働きかけによって、対話空間としての聞き書きの場が整えられていったということを伝えている。

4. おわりに

本論文の目的は、松茂良の「書かれなかった／語られなかった沖縄戦体験」が、筆者による聞き書きの中でいかに語られていったのか、そしてその変化を可能にした「対話空間」が、どのように形成されたのかを明らかにすることであった。以下では、本論文の内容を端的に整理するとともに、本論文が持つ学術的意義を述べる。

本論文では、松茂良美智子の未公開手記と筆者による聞き書きを用いた。これらの資料分析から明らかになった点として大きく2つ挙げられる。第1に、手記に記されなかった苛烈な沖縄戦体験と、それを抱えて生きる現在の松茂良の感情が、筆者との継続的な関わりの中で語られていったという事実である。筆者が聞き書きを行う前、松茂良は文筆家の取材に応じていたが、そこでの聞き書きは、沖縄「戦時」体験を淡々と聞き書きする形式にとどまっていた。このような形式では、松茂良の記憶は「沖縄戦の証言」として固定され、松茂良が戦後も抱え続けた甥や少年の死に関する情動が聞き取られなかった。しかし、松茂良が本当に聞き手に伝えたかったのは、戦争の傷を抱え込みながら生き続ける戦後（現在）の体験であった。つまり、松茂良は単に過去の出来事を回想しているのではなく、現在も続く「＜出来事＞の

42) 松茂良美智子への聞き取りより、2022年3月。

暴力の痕跡」[岡 2000：92]を語っていたのである。本論文は、松茂良の語りを連続的なライフヒストリーとして描出することで、戦時から戦後を貫いて刻印される記憶の一端を明らかにした。

第2に、松茂良が体験を言語化していく過程において、筆者や花城による体験の整理が重要な役割を果たしたという点である。本論文では、筆者による松茂良への聞き書きの過程を再帰的に検討し、聞き手が語り手との関係性を構築しながら、語り難い体験やトラウマ記憶を言語化する場をいかに作り出していったのかを明らかにした。とりわけ、1961年の手記の空白が、約60年を経た聞き書きの場でいかに言語化されたのかを描出した。その過程から明らかになったのは、松茂良の語りは、聞き手との関係性のなかで漸次開かれていく協働的な産物であると同時に、松茂良自身が混沌とした体験の脈絡を掴み直し、再構成する場でもあったということである。

以上の知見を踏まえると、沈黙から発話への動的な変化のプロセスのなかで、語り手自身が体験を整理・再構成していく営みであること、そして語り手と聞き手の相互作用のなかで記憶が再構成されていくことが明らかになった。一方で、本論文は松茂良1人の語りに焦点を当てた事例研究である。そのため、他の体験者との比較や、聞き手のジェンダーや社会階層[丸山 2022]、語りが聞き取られる時代性などが語り手の発話・沈黙に与える影響の検討は、今後の課題として残されている。

[参考文献]

- 足立重和,「生活史研究と構築主義—『ライフストーリー』と『対話的構築主義』をめぐって」『社会科学論集』40・41号 2003年、219-231.
- Andrew, Huyssen, *Presents Pasts: Urban Palimpsests and the Politics of Memory* (Stanford University Press) 2003.
- 蘭由岐子,「いま、あらためて“声”と向き合う」『社会と調査』3号 2009年、38-44.
- 防衛庁防衛研究所戦史室,『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』(朝雲新聞社) 1968年.
- Cathy, Caruth, *Trauma: Explorations in Memory* (Johns Hopkin University Press) 1995.[下河辺美知子訳,『トラウマへの探究—証言の不可能性と可能性』(作品社) 2005年.]

- Felman, Shoshana, “Education and Crisis, or the Vicissitudes of Teaching” Felman, Shoshana and Laub, Dori, *Testimony Crisis of Witnessing in Literature, Psychoanalysis, and History* (Routledge) 1992, 1-56.
- Frank, W Arther, *The Wounded Storyteller* (The University of Chicago) 1995. [鈴木智之訳, 『傷ついた物語の語り手—身体・病い・倫理』(ゆみる出版) 2002年.]
- 繁多川自治会, 『繁多川100周年記念誌 繁多川』(繁多川自治会) 2012年.
- 原田悦子, 「意識再考: 記憶心理学の最近の成果から」『科学哲学』Vol.33 (2) 2000年、107-118.
- Halbwachs, Maurice, *La Mémoire Collective*, Paris (Presses Universitaires de France) 1968. [小関藤一郎訳, 『集合的記憶』(行路社) 1989年.]
- 石田忠, 『反原爆—長崎被爆者の生活史』(未来社) 1973年.
- 石川良子, 「ライフストーリー研究における調査者の経験の自己言及的記述の意義—インタビューの対話性に着目して」『年報社会学論集』25号 2012年、1-12.
- 『「ひきこもり」から考える—<聴く>から始める支援論』(ちくま新書) 2021年.
- 石川良子・西倉実季, 「ライフストーリー研究に何ができるか」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか—対話的構築主義の批判的継承』(新曜社) 2015年、1-20.
- 石川勇人, 「抵抗への参加: 沖縄戦の聞き書きの現場からの応答」『臨床哲学ニューズレター』7号 2025年、52-56.
- 石原昌家, 「沖縄戦体験記録運動の展開と継承」『沖縄文化研究』12号、239-266.
- 糸満市史編集委員会, 『糸満市史 資料編7 戦時資料 下巻—戦災記録・体験談—』(糸満市役所) 1998年.
- Jay Winter, “The Memory Boom in Contemporary Historical Studies” (*Raritan*) 21, 2001, 52-66.
- 岸政彦, 『マンガーと手榴弾—生活史の理論』(勁草書房) 2018年.
- 小林多寿子, 「二人のオーサー ライフヒストリーの実践と呈示の問題」桜井厚・好井裕明編『フィールドワークの経験』(せりか書房) 2000年、101-114.
- 小林多寿子・浅野智彦編, 『自己語りの社会学—ライフストーリー・問題経験・当事者研究』(新曜社) 2018年.
- Lifton, Jay Robert, *Death in Life: Survivors of Hiroshima* (Random House), 1968. [榊井迪夫・湯浅信之・越智道雄・松田誠思訳『ヒロシマを生き抜く(上) 精神的考察』(岩波現代文庫) 2009年.]
- L.L. Langness, Gelya Frank, *Lives: An Anthropological Approach to Biography* (Chandler & Sharp Publishers) 1981. [米山俊直・小林多寿子訳, 『ライフヒストリー研究入門—伝記への人類学的アプローチ』(ミネルヴァ書房) 1993年.]
- Lynn Abrams, *Oral History Theory* (Routledge) 2009.

- 丸山里美,「女性の語りを聞くということ」岸政彦編,『生活史論集』(ナカニシヤ出版) 2022年、453-489.
- 宮地尚子,『環状島＝トラウマの地政学』(みすず書房) 2007年.
- 宮坂道夫,『対話と承認のケア 増補版 ナラティブが生み出す世界』(医学書院) 2025年.
- 森茂起,『トラウマの発見』(講談社) 2005年.
- 中野卓,『口述の生活史—或る女の愛と呪いの日本近代』(御茶の水書房) 1977年.
- 直野章子,『原爆の絵と出会う—込められた想いに耳を澄まして』(岩波ブックレット) 2004年.
- ,「被爆を語る言葉の隙間—<被爆者>の誕生と『被爆体験記』の始まりから」『フォーラム現代社会学』(8) 2009年、13-30.
- ,『原爆体験と戦後日本—記憶の形成と継承』(岩波書店) 2015年.
- ,「出来事とトラウマの在り処—トラウマ論が示す歴史の方法論をめぐる」田中雅一・松嶋健編『トラウマ研究 1 トラウマを生きる』(京都大学学術出版会) 2018年、87-118.
- 根本雅也,「証言者になること—広島における被爆者の証言活動のメカニズム」『日本・オーラル・ヒストリー研究』11号 2015年、173-192.
- NHK沖縄放送局,『沖縄戦の絵 地上戦 命の記録』(日本放送出版協会) 2006年.
- 西村明,「トラウマから架橋へ—玉砕戦生還者の記憶がひらく新たな回路」田中雅一・松嶋健編,『トラウマ研究 1 トラウマを生きる』(京都大学学術出版会) 2018年、551-576.
- 野上元,「歴史と向き合う社会学—資料と記述をめぐる多様なアプローチにみる可能性」『年報社会学論集』22号 2006年、1-9.
- 野口裕二,『ナラティブ・アプローチ』(勁草書房) 2009年.
- 岡真理,『記憶／物語』(岩波書店) 2000年.
- 朴沙羅,「物語から歴史へ—社会学的オーラルヒストリー研究の試み」『ソシオロジ』56(1) 2011年、39-54.
- Paul Connerton, *How Societies Remember* (Cambridge University Press) 1989.
- 桜井厚,『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』(せりか書房) 2002年
- ,「<2021 年度文学部講演会 講演録>ライフストーリー研究はおもしろい—インタビューの対話性と語りの多元性」『フェリス女学院大学文学部紀要』57号 2022年.
- 佐藤信吾,「対話的構築主義によるジャーナリズムの戦争証言インタビューの検討—NHK戦争証言アーカイブスを事例として」『社会学評論』2021年、294-311.
- 嶋津与志,「慶良間諸島の惨劇—集団自決事件の意味するもの」『青い海』No.62 5月号(ひるぎ社) 1977年、78-89.
- 清水史彦,「米軍が最初に上陸した慶良間諸島」吉浜忍・林博史・吉川由紀編『沖縄戦を知る事典 非体験者世代が語り継ぐ』(吉川弘文館) 2019年、32-35.

清水透『増補版 エル・チチョンの怒り』(現代岩波文庫)2022年.

田村洋三,『ざわわ ざわわの沖縄戦 サトウキビ畑の慟哭』(光人社NF文庫)2011年.

鳥山淳,「沖縄戦をめぐる聞き書きの登場」倉沢愛子・杉原達・成田龍一ほか『岩波講座
アジア・太平洋戦争6 日常生活の中の総力戦』(岩波書店)2006年、381-406.

Williams, Raymond, *Marxism and Literature*, Oxford: (Oxford University Press), 1977.

八木良広,「原爆問題と被爆者の人生に関する研究の可能性—R.J. リフトンのヒロシマ
研究とそれに対するさまざまな反応をめぐって」浜日出夫・有末賢・竹村英樹編
『被爆者調査を読む—ヒロシマ・ナガサキの継承』(慶應義塾大学出版会)2013年、
151-176.

屋嘉比収,「歴史を眼差す位置—『命どう宝』という発見」上村忠男編『沖縄の記憶／日
本の歴史』(未来社)2002年、135-164.

———,『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす—記憶をいかに継承するか』(世織書房)
2009年.

[資料・新聞記事]

第24師団司令部史実史料 第32軍残務整理部,1963複製,「第24師団沖縄作戦記録 復員
局調整」,防衛研究所図書館所蔵。

松茂良美智子の手記.

『沖縄タイムス』2017年7月23日 朝刊25面、「語れども語れども・うまんちゅの戦争体
験255」.

謝辞

本研究はJST(次世代研究者挑戦的研究プログラム)課題番号JPMJSP2138の助成によ
る成果の一部です。なにより、長年にわたって沖縄戦体験を話してくださった松茂良
美智子さんに、心より御礼申し上げます。

(大学院博士後期課程学生／沖縄国際大学南島文化研究所特別研究員)

SUMMARY

Constructing Dialogical Space within Memories of the Battle of Okinawa: Sites of Life History Narration

Yuto ISHIKAWA

This paper examines how the unspeakable experiences of the Battle of Okinawa begin to be articulated and documented through the gradual development of a relationship between interviewer and interviewee, and how the interviewer plays a role in eliciting memories of these frightful experiences.

To analyze these issues, this paper focuses on the life history of Matsumora Michiko, a survivor of the Battle of Okinawa. Matsumora was born in 1932 in Hantagawa, Mawashi village, and experienced the Battle of Okinawa at age 13. In the early 1960s, she wrote six handwritten memoirs about the Battle of Okinawa, but she never showed them to her family or to any previous interviewers. Through this author's interviews with her, however, it became clear that there were experiences of the Battle of Okinawa that she had not been able to write about. About a year after my initial interviews, Matsumora expressed a desire to share her wartime history, and a newspaper reporter named Hanashiro (a pseudonym) joined the interview process.

It is not easy for survivors of war and violence to narrate their experiences. Therefore, the presence of interviewers becomes essential to help organize the context of those experiences. In many qualitative research studies, the interviewer organizes and interprets the context of testimonies, aligning testimony with historical contexts and other relevant frameworks to construct the narrative. In this regard, Hanashiro also played this role of interpreting testimony, but she did so attending to elements surrounding the narration — such as the sounds of bombs exploding, the smell of the *gama* (dugout), and Matsumora's emotional responses during the Battle of Okinawa. This approach not only clarified Matsumora's experiences but also returned narrative authority to her. Although initially regarded with suspicion as an outsider, the interviewer gradually came to be

seen as someone “needed” as their relationship developed.